

光りのスペイン 画面の拡大・縮小、ブラウザの全画面などで見やすくご利用ください



はつくり文庫

DBL・埋蔵文学発掘・会

著作権に於いて記載されたものは、コピー・転送禁止です。

光りのスペイン・一

尾崎 寛

戻り⇒ブラウザの戻り（矢印など）で

俺は、ある計画を抱いて急な階段を走るように降りた。扉を開けるとカウンターの向こうから、いらっしやいませと丁寧な挨拶が俺をむかえる。俺の思ったとおり店の掃除が終って開店間際だった。コップを磨いている遠藤一文、遠ちゃんというウェイターは、几帳な男で時間が狂ったことがない。蝶タイにきちんと制服を着ている。「ママもまだ来てないですよ。一杯やりながら待って下さい。バーボンの水割りでしたね」たのむよ、といいながら俺はカウンターに掛ける。馴れた手つきでピックで氷を砕きながら遠ちゃんが訊いた。「今日はお早いですね」「なにが早いもんか。もう九時だぜ。お子様のお休みの時間だよ」「ははは、それもそうですね。どうもこういう仕事をしていると夜昼が逆になっていけません。どうぞ」水割りが俺の前に出た。俺は一口飲んで、バーボン特有の香りを味わっている間、遠ちゃんが喋っていた。「最初のお客さんが桜井さんでよかったですよ。なんというか、つい縁起をかつぎましてね。最初に嫌なお客さんがみえるとうんざりするんですよ」「お世辞言ったって駄目だよ。文無しだからね。ところでママは何時頃来るかな」「もう来るでしょう」「いや、こっちのママじゃなくて新橋のママさ」「そうですね……早くても十一時でしょう」

赤坂のクラブ「青い猫」の最初の客として俺は座っている。店はそう広くはないが、毛足の長い真紅の絨毯を敷きつめ、天井や壁の装飾もクラブとしての威厳をなんとか保っている。俺は頭の中では、およそ場違いもいいところだと考えながら、体の方はすっかり場馴れして安心し切っている。大体この店は、若い女をつれた五十男が殆どだった。自腹にしろ交際費にしろ、それ位いの男でないとは勘定が払えない。座っただけで一人一万円なら当然のことだろう。いや、女だけで来る客もある。年配の女が一人かあるいは二人連れでやってくる。この種の女は食欲で得体が知れない。時々、もう少し若い男が女連れで来るが、要領よく三十分もすれば帰ってしまう。とにかく俺や山本のような見るからに若い男など一人も寄りつかない。時には奇異な目で見る客さえある位いだ。

いい加減にこんなことは止めなきあな、いつまでも続く訳がないし、続けてもしようがない、と思いつながら一杯目の水割りをあけると、遠ちゃんがコップを引いていった。「新橋のママに何かご用でもあるんですか」「うん、ちょっとな」「だけど桜井さんもおかしな人ですね。新橋のママにご用なら新橋のお店へ行らっしゃればいいのに」遠ちゃんが笑ったのにあわせて俺も笑ったが、実はわざわざ赤坂へ来たのは俺なりの理由があった。新橋の店には、恐ら

く山本が行っているだろう。今日の話は山本抜きでいたいのだ。もとはといえば、俺がこの店に来るようになったのは、山本が原因なのだ。山本は最初俺を誘って新橋の店へ行った。彼はそのころ新橋の店へ相当かよっていた。なんの変哲もない、むしろ色気のなさすぎるバーだったが、そのママと気性が合ったのだろう。いつも季節にあった気のきいた和服のママの堅いことは、まるで少女の異状なまでの潔癖さと同じで、酔漢が女の子に触ろうもんなら一喝される。四十歳くらいの細身のママと山本は気が合った。詳しくは知らないが、ママは寡婦であった。

やがて二人で連日のように通うようになった。二年前の、やはり看板まで粘っていたある日の帰りがけに、ママは俺達を「赤坂へ飲みにいきましょうよ」と誘った。それが「青い猫」だった。潔癖で勝気なママが、俺の計画にのってくれるだろうか……考えていると、突然後から俺の首へ柔い腕が巻きつき締めあげた。「来てくれたの、うれしいわ」「青い猫」のママの綾子だった。「遅かったじゃないか。さては旦那が来てたな」「うそよ、そんなものいないもん」彼女は俺をボックスへ行こうと手を引いたので立ち上った。セットだけで俺の一月の月給分もかかるという頭に手をやりながら、「セットに行ったらまたされちゃったの」遅刻の言い訳をした。彼女はまだ三十になっ

いのではないだろうか。あるいは少し過ぎていくかも知れないが、小肥りめの体には若さが残っていた。ワインレッドのドレスが、よく似合っている。

近頃の俺は、全てのこととうんざりしていた。二十八という歳が、そう思わせるのだろうか。既に夢などは口走らなくなっていたし、将来に目的もなかった。いまの出版会社に入社した頃は、俺は中年の係長や課長を軽蔑の目で見か見ていなかった。疲労の色をにじませ黙々と消極的にならない程度に仕事をし、帰りにはたまに赤提灯で一杯やる。話題は、家族のことか自分が若かった頃のことと相場が決まっている。そして最後には「若いものはいいなあ」と締めくくる。その言葉を聞く度に、俺は血が逆流するのさえ感じた。

だが、時間の流れは、俺も彼等と全く同じ道を歩いているのだと否応なく、徐々にではあるが確実に感じさせるようになった。このままでは、俺も十年後には、若いものはいいなあと口走るのではないだろうか。そう思うと、髪が逆立つほどぞっとした。しかし、現実には、常に心の底に苛立ちを感じながら仕事も適当に手を抜いて、山本と飲み歩いているだけだった。いったったか、山本にふとそんな話しをしたら、「俺もそうだったよ。もう考えもしないけどな」と言った。彼は今年三十三だった。

俺の気持ちが暗くなつていくのに反して、体の奥が、熱い光りを渴望していった。どこでもいい、太陽の光りのあふれる所で自由に生きてみたいと。地中海沿岸の国々やエーゲ海、あるいはギリシヤの丘と紺青の海を、砂漠で水を求めるように俺は求めはじめていた。中でも俺を魅惑したのは、スペインだった。光りに満ち青い海をもつ国へ行つてどうなるものでもないことは充分承知していた。が、日常的な分別などどうでもよかった。とにかく出発することが先決だった。駄目なら駄目でやり直せばいい、多少遅れをとつても三十前ならなんとかやり直せるだろう……。そのためには、まとまった金が必要だった。

「どうしたの」と綾子が俺に訊いた。「その顔はなにか秘密のある顔よ」テーブルの上には二つのグラスと氷、それに甘いものの中で珍しく俺の氣にいった外国製のチョコレートが出ていた。チョコレートの小さな粒を口の中へほうりこんでいると、綾子は水割りを作りながら「いい人ができたんでしょう」と笑いかける。「男のひとが夢をおっているときは、みんなそんな目つきになるわ」「そんな高尚な目をしていたかい」「ええ。……恋人?」「いや、残念でした」「本当に?」「じゃあ、何かしら」コップを受け取りながら綾子の顔をのぞく。いつも不思議な顔だと思ふ。とりたてて美人という程ではないが、大きなつくりの

肉感的な顔立ちは、まだ残っている若さのせいか明るい魅力があった。「アヤちゃんをどうして口説くか考えていたのさ」「うそばっか。そんな気もないくせに」やがて十時半をまわり客が入り始めた。俺は遠ちゃんに新橋へ電話をいれてもらう。電話を切った遠ちゃんが俺に耳打ちした。「ママはこちらへいらっしやいます。それから、山本さんもご一緒らしいですよ」まずいな、と俺は思う。そして今夜はあきらめるかと考えていると、「山ちゃんも来るの」と綾子が訊いた。俺が、いま新橋にいるから来るらしい、と言うと、「そう、わたしあの人のが手なの。ごめんなさい、あなたのお友達の悪口をいうつもりはないんだけど。あの人の目で見られるとこわいの」と少し眉を寄せた。俺は綾子の肩をたたいた。綾子の言い分に無理はなかった。

山本を時どき襲う癩症の激しさは、殆ど毎日つき合っている俺でさえ付き合いきれないな、と思わせることが少くないのだから。ただ俺は、彼の普段穏健な精神状態が突然崩れ落ちる要素を知っていたし、狂乱した彼のあつかいを長い付き合いで心得ていた。彼の心の奥に在る禁断の園は理解し難い。もちろん誰でも密かにそうした世界を持っているのだが、彼の他人と異るところは、その世界に少しでも足を踏み入れようとしたら、意見がましいことを言おう

ものならたちまち発狂するという反応の激しさだ。間違いなくパラノイアの症候だと俺は思っている。パラノイア特有の肉体的特徴もそっくり備えているし（中でも異様な眼球の大きさに顕著にあらわれていた）、突然反転する人格は、病状の進行の加速を思わせる。ただ彼の場合、外部から刺激をあたえない限り安全だった。

綾子と話してる間に店は混んできた。相かわらば中年過ぎた男と若い女の組み合わせばかりだ。客が入ってくる度に、綾子は立って行って客を迎えた。部屋の隅に設けられた小さなステージで、ギターを抱えた男が歌いはじめた。声の良さを買って専属契約をしているということだった。男は柔く伸びのいい声で主にシャンソンを歌ったが、客のリクエストに応じて歌謡曲を歌うこともあった。いまはスペインの民謡だというバラード風の唄を静かに歌っている。

闘牛場は今日も満員

歓声と歌声が流れ

光りは世界にあふれているのに

わたしの心はなぜ寒い

去っていった男への思慕が、テーブルの赤いランタンの間を煙草の煙のように流れていく。俺は、少しまわった酔いの中で聞いていた。

十一時半になって、もう帰ろうかと思つたところへ新橋のママと山本が入ってきた。あら、来てたのとママが、いつもどおりの元気のいい声で俺の隣りへ座り、賑やかに四人で飲みだした。やがて山本がトイレに立つとママが心配そうな表情で俺に言った。「山ちゃんの結婚話しどうなったの?」「さあ、どうも駄目なんじゃないかな」「どうして。やっぱりお母さんのことが……」「恐らくそうだと思うけどね。まさかその話しをしなかつただろうな」「さっきね、ちよつときこうかなと思つただけど、ほら、すぐおこるでしょう、その話しになると。だからよしたの。しつ、来たわよ」山本が帰つて来た。もう随分飲んでいるようだった。ママは、にこつと笑うと山ちゃん歌つてよと催促した。よし、と山本は元気よく舞台へ向かう。俺とママは拍手した。連られて客の中からも拍手が起きた。山本はピアノ弾きと相談していたが、やがてオーソレミオ…と歌い出した。元合唱部の彼は、テノールでも高い音を得意としていた。歌は旨いほうだが、自分の歌にのり過ぎてリズムをはずすくせがある。彼が歌い始めるとママが言った。「でも、どうしてなんでしようね。男ならはっきりしなさいよ、てどやしてやりたくなるわ」山本は結婚することになつていた。本人もそのつもりであることを俺は聞いていた。とこ

ろが、相手の女が親と一緒にはいやだと言いつ出した。彼のアパートは八畳一間に小さな台所がついている。現在は、ここで母親と暮しているのだが、彼の田舎には誰も住んでいない持ち家があった。彼が結婚すれば、一旦母親には田舎へ帰ってもらい、余裕ができたり、母親の状況が変わればあらためて同居する。ほぼそんな予定で結婚相手も納得していた。

彼以外から話しを聞いていないので、話しがどこまで正しいのか、俺には、もちろん判らない。とにかく母親は、形ばかりの結納が済んでも一向に帰る気配がなかった。相手の女は、それを不審に思い彼に問い詰めたらしい。ところが彼の返答がはつきりしなかった。そこで、女は狭いアパートで母親と一緒に暮せない、と言いつ出した。彼の母親は、武士の妻といった恐しい位い厳格な人で、その話しは「母親と一緒にはいやだ」という所に態度を硬化させてしまった。話しが正確に伝わらなかったのだろう。「そんな女は家の嫁にするわけにはいかない」六十を越えてまだまだ体力もある母親は、嫁は家に嫁すものという前代の観念を堅く守っていた。そして話しは救い難いまでにこじれてしまったのだが、納得のいかないのは彼の態度だった。間に立って事態を改善しようとしなかった。俺には、故意に努力しようとしないとしか思われないのだ。いつか二人で飲

んでいたとき、「お前は、本当にあの人と結婚するつもりか。官舎の方はどうなったんだよ」と強い調子でせまった。山本は国家公務員だ。結婚の場合優先的に官舎に入れる。官舎は運良く通勤一時間以内で決定している、と言う。「じゃ、なにが問題なんだ？お母さんか？二・三年は田舎へ帰ってもらえるよう説得できないのか？」「なかなかそうもいかないんだよ」と彼は照れたような笑いの表情になった。俺の心の中でぼつと黄色い警戒信号がともった。彼は笑っている訳ではないのだ。心の中で起きている変化に一生懸命あらがっているのだ。ここでもう一押しすればたちまち狂乱状態になる。俺は腹の中を攪乱された不快な気分だったが、そこで打ち切るより仕方なかった。

全くママの言い分ではないが、はつきりしろと怒鳴りたくなる。一応の顛末を簡単にママに説明した後で、「恐らく、彼には自分が惚れた相手よりも、母親の眼鏡に合わないということが決定的な問題なさ。全ての原因は、彼と母親の俺達の理解を超えた精神的な関係にあるとしか思えないよ」とステージで歌っている山本を見ながら話した。「なんだかかわいそうな気もするわね」威勢はいい情に弱いママはぼつんと言った。

その夜結局用件をきり出せないままに飲んでいると、三時頃にママが帰ると言った。じゃ俺達も帰ろうと俺と山本

は一緒に外へ出る…つい先日までの暑い日がうそのように初秋の戸外は冷え冷えとしていた。ママの呼んだハイヤーに乗りこみ、まず一番近いママのマンションへ向かった。降り際にママが小声で耳打ちした。「話があるから、今度一人で新橋へ来てね」それだけ言うときつと降りてしまった。立っているママに軽く手をあげて答えると車は走り出した。フォードのゆったりした車内は広い。ちやちなソファより余程大きく、柔い座席に互いに前を見つめたまま山本と並んでいた。車は滑るように夜の底を走っている。

それにしても山本は、三日にあげず新橋に通っている。俺は疑問に思っていることを幾つか訊いた。「新橋に随分飲み代がたまっているだろう。大文夫か。新橋はともかく赤坂はどうなっているんだ」山本は、心配ないという風に手ををひらひらと振る。「大丈夫。新橋はボーナス払いと決まっている。それに学割りで飲ませると言ったら、ママがいいと言ったからいまのペースで半年通っても十萬くらいのもんさ。それに赤坂は、ママのお遊びだからね。あのママが俺達から金を取れるとは思ってないよ。もしそうなら、こんな貧乏人を最初から連れて行くもんか。なあに、五六人の客に五千円ずつ余計に上乘せすればそれでいいんだから」彼はいつでも有利になるような配慮を絶対に忘

れなかった。時には、そうした彼の性質が狡猾という印象を与えないでもなかったが、俺は彼に考えがあるのだろうと安心して飲んでいた。とにかく俺達の飲代は、常に脂肪のつき過ぎた男達がまかなってくれたようだ。「それに」と山本。「お前は最近どちらの店へも行つてないだろう」俺は記憶をたぐる。「この夏以降だと新橋へ三回、赤坂もそれくらいかな」「それじゃたいしたことないよ。せいぜい二万ぐらいのもんだよ」「うんと遊んで、あの色気違いどもに払わせてやる方が店のためにもなるな」そうだそうだと二人は無責任に納得した。「そりあそうと、ママと綾子が親子って本当かい。全然似てないしタイプも違うけど」以前から不審に思っていることを山本に訊いた。なぜか、彼は細かい事情をよく知っていた。「親子と言つても養女だよ。赤坂の店を開くについて信用のおける人間を置く必要があつたんだよ。ママは新橋の店もあるしそうそう目が届かないからな」「だから綾子を養女にして店をまかせたということか」「ああ」「だけど、もうひとつピンこない話しだな」「うん、感じとしてはもう少し混んだ事情がありそうだな」俺は山本がもつと詳しい事情を知っているかと思つたが、彼もそれ以上は知らなかった。

赤坂から三十分許り走つて、俺は深い夜の底へ降りた。車は山本を乗せて去つて行つた。静閑な住宅地は、点々と

した寂しい街灯の光りだけが、腹をすかせた野良犬と俺を照っていた。その日に限って暗いなと俺は思った。いつもとどこも変らぬ夜だったのに。そして、その暗闇の中の遙か遠くに光り輝く真白な石造りの街を見た。それは、ほんの小さな点ほどの光景だった。見つめていると市場の陽気な雑踏の音が微かに聞えるようだった。スペインだ・・・思わず俺の口が動いていた。俺はぶつぶつ言いながら歩き続けた。スペイン・・・光りの国・・・セビリア・・・マドリード・・・ドンキイ・ホーテ・・・ピカソ・・・

次の日、かなり強度な二日酔いだった。口の中に乾いた砂をおしこまれ、脳髓に熱湯を注がれたような気分で形だけは仕事を済ませた。が、夕方近くなると殆ど普通の調子に戻った。八時まで二時間残業したのは時間調整にすぎなかった。課長は、ほう頑張ってるね、悪いけど先に失礼するよ、約束があるからと恐縮して帰った。八時丁度にも新橋へ電話する。やはり山本が居た。全くタフなのに驚く。いらっしゃいよ、とママが言ったが、また後で電話すると言って一応切った。

「青い猫」に昨夜と同じ九時に入る。ドアボーイの桐鳥が金モールの制服で迎えてくれた。今晚は、いらっしゃいませ、と元気に声をかけてくる。若くて体力があり、彼の本務に適していた。深夜に警察が巡回することがある。

彼は、そのための見張りとガードマンが本来の仕事だ。「精勤だろう。こう真面目に通うんじや月給をもらわないとあわないな」と言いながらカウンターにかけようとする、今日は既に綾子が来ていた。ボックスへ座ると、「きのうはママに用があつたんですつて」と綾子が水割りを作りながら言った。「それで、用は済んだの」「いや。だめだった」「そう、どんな用なの。わたしが聞いちやまずいこと」「そんなことはないさ」と俺は嘘をついた。とにかく何か答えなくては・・・咄嗟に「この勘定も随分たまっているだろうと思つて。ママに相談したかっただけさ」と答えた。これが、まずかった。途端に綾子の表情が堅くなった。くまずい！内心にドカンときた。が、せいっぱい冷静を装つて綾子を見つめていた。「そう、そんなにわたしは信用しないの」綾子の語気は、柔らかだが鋭かった。「言ってみれば、わたしはただの雇われママよ。なんの力もないわ。けどよ、それじゃあんまりじゃないこと」驚いた遠ちゃんがかウンター越しに見ている。俺は、收拾のつかないことになると予感した。が、幸いにも綾子の言葉はそこでつまってしまった。彼女達は絶対に涙を見せない。屈辱に血の惨むほど唇を噛んでも涙だけは見せない。それが、この世界で生きていく女たちの矜持なのだ。ところが、綾子の目から突然ぽたぽたと涙が落ちた。俺は綾子の体に腕を

まわした。綾子は途切れ途切れに訴えた。「ひどい・・・あんまりよ」

俺は綾子を落ち着かせようと背中を撫でながら謝った。自分だってそんな風に考えてはいない、迷惑をかけたくなかっただけだ。暫くして綾子は、多少落ち着いてきた。いや、落ち着こうと努力していた。「最初は、ママに言われたからあなた達に負担のかからないようにしていたのよ。でも、いまはちがうわ・・・ほら、前にプレゼントしてくださったでしょう、わたしのお誕生日に」もう半年以上前のことだが、やはり四人で飲んでいたときママが俺にそつと言った。「今日ね、綾ちゃんの誕生日なの。おめでとう、言ってやってね」俺はトイレへ行くふりをして店を抜け出し、運よく遅くまで開いていた果物屋で大きいメロン一個を箱に入れ、それにリボンをかけてもらおうと綾子に贈った。そう言えば、あの時も綾子は涙をながした。「わたしに・・・」驚いた顔がたちまちゆがんで、突然抱きついて泣き出したので、かえって当惑した覚えがある。「わたしね、本当のこと言うと、この歳になるまで誰にも誕生日を祝ってもらったことなかったのよ・・・あなたにはわからないでしょうね、子どものときからじゃま者でそだって、おとなになっても世間がまともに相手してくれなかった女が、生まれてきたことを、いま生きていることをお

めでどうって言われた気持ちなんて。小学生のころ友だちが、今日たんじょう日だ、プレゼントはなんとかだ、てさわいでいてもなんの感情も起きなかったわ。うらやましいとさえ思ったこともなかった・・・本当は、うらやましくなきやいけないのよね・・・あなたにプレゼントもらって、はじめてそのことに気がついたの。プレゼントで、こういうこと・・・だから、みんなさわいでいたんだって」

話しているうちに綾子は落ち着いてきた。おそらく、自分の奥に巣食っていたオコリのような何かを少しづつ吐き出したのだろう。俺はだまっていた。くそう、嫌なものを吐き出してしまえばいい、様子をそれとなく覗っていた遠ちゃんも、会話は届かないが事態がおさまっていきそうなのを感じ安心したらしい。「プレゼントをくださるお客さんはいっぱいいるわ。くださる以上は、当然高価なブランドものばかり。でもね、正直負担になるだけなのよね。こぼむ訳にもいかないし、もらったら覚えておかなきゃいけないし・・・ほら、わたし時計してないでしょう。もしMさんからもらった時計したら、やっぱり時計をくれたNさんが、自分あげたのじゃないな・・・と、思わないか・・・そう考えるだけで疲れちゃう。ヒモをくりつけられたように落ち着かないの。同業の友達は、そんなのいちいちまじめに考えてたらやっつてらんないよ、もらっただけ得、あ

とのことなんかしらないと、割り切って考えなきやて言う
んだけど・・・ごめんなさい、いつの間にかグチをこぼし
ちゃった。・・・わたしはあなたを信じてる。だから、さ
っきのはなしママに言わないでね。わたしを信用して「寄
せていた互いのぬくもりが、心まで暖かくしていた。難関
を乗り越えた安堵に包まれる。「ごめんなさい、泣いたり
して。これじゃあやっぱり失格よね。お化粧直してきちん
とやり直すわ」二・三分で戻ってきた綾子は、俺の前で、
いらっしやいませと深く頭を下げた。どうぞと隣りをすす
め並んで掛けると二人とも笑い出した。「ひとつきいても
いい？」中断した水割りを作りながら言った。「なんだい」
「どうしてバーボンが好きなの？たいていの人はスコッ
チなのに」俺は苦笑した。俺がバーボンを好むのは、簡単
な理由だった。アメリカの著名な作家の対談の中で、「ヒ
ップスはバーボンを飲み、保守派はスコッチを飲む」とい
う言葉が気に入ったのだ。もちろん好みにあったのも確か
なのだが。その話しを綾子にすると、あなたらしいわと笑
った。「断っておくけど、どっちがうまいということなら、
もちろんスコッチさ。ただバーボンはなんというか、アメ
リカの野良の匂いにするんだな。行ったことないけど」と、
笑ったところへ遠ちゃんが、電話ですと、俺を呼んだ。最
初の水割りに口をつけたときだった。カウンターの端で電

話を差し出している遠ちゃんは緊張した表情で、「新橋のお店でなにかあったらしいですよ」と俺を見つめる。電話の相手はママだった。とにかくすぐに来て！と、ほとんど叫び声だった。「どうしたのかしら」と綾子も心配顔だ。

俺は、一気にグラスを干すと飛び出した。車を拾って新橋へ急ぐ。店の前でママがうろろると待っていた。「どうしたんだい」俺が車から降りると「たいへんなの、山ちゃんがあれてるのよ」と俺を中へ押しこんだ。テーブルが転り、砕けたコップの破片が散乱している。床の敷物はビールや煙草の灰が大小の斑点を作っていた。山本は混乱の中で一人言を言っている。「なにも知らないくせに……お前らに分かってたまるか……」

俺はテーブルと椅子を元に戻すと、バーテンに掃除を頼んでビールを抜かせた。「派手にやったな。これだけ運動しちあ疲れたろう」ビールをついで山本の前に置くと、彼は息もつかずに流しこんだ。彼の飲み続けるままにコップを満してやりながら俺も飲んだ。ママと店の女達は入口に集って成り行きを見ている。ママが俺を手まねきした。「なんだい」「今日は、うまく言って帰してよ。車代はわたしがもつから」「そうするより仕方がないだろうな」俺は山本を外へ連れ出し、待たせてあった車に乗せた。彼は、別の店で飲み直そうと抵抗したが、俺は運転手に行き先を言

って無理矢理押しこんだ。車が出ると誰ともなく大きな溜息をついた。互いに「ご苦労さま」と、店に戻って座り直した。バーテンが掃除をして大体片付いていたが、ガラスの破片がないか、部屋の隅まで掃除している。「飲んでよ。今夜はおごりよ。」ママは俺にビールを注ぎ「どうしよう、今日閉店しようかしら・・・」と辺りを見回す。絨毯や壁にはシミが見苦しく残っている。三人の女も呼んで一緒に飲み始めた。「でも驚いたわね」とこの店で一番売れっ子の女、「だって突然ガチアンでもものすごい音がしたでしょう。なんだと思ったらテーブルがひっくりかえって、山ちゃんも鬼みみたいな顔して仁王立ちしてるじゃない。額に青筋が浮んでたわね。それからいきなりグラスを壁に投げつけたのよ。グラスが割れてかけらが向うまで飛んだんだから。そしたら、ママまで一緒になってグラスを投げたのよ」

「灰皿もよ。だって、くやしいじゃない。あんちクショウだけに暴れさせておくのは。だからわたしも思い切り投げてやったわ。『あまったれるんじゃないよ』てね。見事にわれたけど、あの灰皿、ガレなのよ。あーあ」みんなさっきまでの不安を忘れて大笑いした。いかにもママならやりそうなことだと思ふと俺も笑ってしまった。後で聞いた事情は、大体予想通りだった。最初は機嫌よく飲んでいたのだが、話しが山本の結婚のことになり、ママが彼の煮えき

らない態度をせめた。そして話しに夢中になり、彼の母親を非難するようなことを言ってしまったのである。そこで彼の手がテーブルにかかった。「でも、どうしてなんですようね」とママ。「あのままだと一生結婚できなくなっちゃうわよ」今日の状態は多少極端だったにしろ、こうしたもめごとが常にあるにもかかわらず山本とママは、やはり結構気の合う同志だった。きつと明日になれば、またけろっとして山本はここへ来るだろう。客が入って女達が居なくなつたのを幸いに、俺はママに少しだけ外へ出られないかともちかけた。後をバーテンに頼んで二人は近くのスナックへ入り、隅の目立たない席を取った。「話しがあるて、なんなの?」「その前に、ママがこの前話しがあると言ってたことは・・・?」「後でいいわよ。あなたからどうぞ」

「実は頼みがあるんだ」俺は計画を話した。新橋か赤坂の店で常連の中から信用できそうなものを選んでブルーフィルムを上映する。会費は一人二万で現金に限る。フィルムや器材は俺が手をまわし、飲み物やオードブルはいつもの通りでいい。必要経費を差し引いて、儲けは新橋の場合はママと切半、赤坂なら綾子も入れて三等分。フィルムは俺につてがあった。

「ブルーフィルム↓ママは目を丸くした。」「どうして、そんな!……だって、ばれたらこうヨ」とママは両手首を

揃えて俺の目の前へ突き出した。大丈夫。ばれる心配はない。話しにのってくる客なら他人にしゃべる心配は絶対ないし、客の中から信用できる奴だけを選べばいいんだから。もしばれたら責任は俺一人です。と、俺は説得した。「ちよつとまって。なんだか突然でぼうとしちゃったわよ。少し休ませて」ママは水を飲んで溜息をついた。「……でも。どうしてそんなことを考えたの。その目は、本気なのね」「金がいるんだ」と俺は答えた。「どれぐらいいるの？ 少しぐらいならわたしだってなんとかなるわよ」「五十万」「五十万……少ないわね。でも、どうしてなの」「訳は、いまは聞かないでほしいんだ。いずれ話すけども」「あなたがそこまで思いつめるなんて、よほどのことね。いいわ、聞かないわ。でもさっきの話は考えさせてよ。いくらなんでも突然すぎるわ」俺は本気で考えてほしいと頼んだ。それからこの話しは、山本にも綾子にも内証にしておいてもらいたい。もちろん実行できると決まれば話すけれど、それまでは誰にも言わないでほしいと念を押した。「ところで、ママの話は……?」「ああ、それね……今日はいいわ。山ちゃんのことだけでもショックなのに、あなたが、もっとショックなことというから、もう、じゆうぶん目まいしそう……それに、急ぐ話でもないし」

ママは、そろそろ店へ帰らなくちゃ、と当然俺も行くものと声をかけ、それとも赤坂へ行ってる？と訊いた。今夜はいろんな事があったので疲れを感じていた。スナックを出たところで「今夜は帰るよ。なんか疲れた。いい返事期待してる」と、別れを言った。ママは「そう、おやすみなさい」と店へ向かいかけたが、立ち止まって振り返り「今度綾ちゃんのポーチをよく見てね」と笑顔で言うのと、足早に去っていった。「?・・・」

綾子が心配しているだろう思い、電話して手短に騒動を話し、今夜はこのまま帰ることを告げた。綾子はまだ話したりないようだったが、俺の関心は、ようやく第一歩を踏み出した将来にあった。これで全てがうまくいく・・・スペインの光りが闇の向こうに近づいてくる予感に酔っていた。

「光りのスペイン(二)へ続く」